



玻璃の先で刺
激して！
南海部 覚悟

梅雨の走りのどんよりとした雨雲が、京都盆地の空を一面に蓋う早朝です。
昨夜からの湿気を含んだ重い空気が、明けやらぬ路地にしつこく漂っています。
―――まだ、雨は降っていません。



鎮守の杜の年老いた広葉樹の枝から、夜を明かした椋鳥の群れが一斉に飛び立ちます。
犬矢来の石畳、玉石に棕櫚縄を結んだ結界が、カタカタ小さな音をたてはじめました。
音は徐々に大きくなり、間口の狭い町屋の格子戸を震わせて、人のいない路地に不気味
なざわめきをもたらします。

軒を伝う電線が、一斉に揺れて夜露の雨を滴らせます。

血相を変えた人々が、路地に飛び出してきました。

「地震だ！みんな起きろ、眼を覚ませ！」

方々に引き響いた悲鳴が上がります。

「―――どうだった奥寺君！今朝の地震、被害無かった？大丈夫だった？」

捜査第一課の、刑事部屋のドアを開けた奥寺の顔を見るなり、笑子が捲し立てます。

「ここに居る先輩は半狂乱で悲鳴を挙げて、私の頬からお尻から手当たり次第引っ叩く
のよ、酷いと思わない？」

パソコン入力に没頭していた玲子が、気が付いて顔を上げます。

「幾ら云っても目を覚まさないからでしょ。ベッドから引き摺り下ろして、テーブルの
下に潜り込ませても・・・。」

「―――大口開けて、涎垂らして寝てたか？」

背後から、笑いながら声を掛けた刑事部長の永山の眼を、笑子の白い視線が掠めます。

「育てていたサボテンの幾つかが、棚から落ちて植木鉢が割れちゃいました。地震の規
模の割には、揺れが酷かったみたいですね？」

「京都市内は震度5強だって、ニュースで云ってたわ。」

「マグニチュードが5.8で、震源地が鞍馬山と高雄山の間だから、京都の都市直下型
地震なんでしょうね。」

「そういえば奥寺君、観葉植物育てるのが趣味だって云ってたわね、サボテンの他は？」

」

「今は、専らサボテンだけです。小さな鉢植えが50個くらいあるかな、見てると何だか心が落ち着いてほっとして・・・。」

「人の感情や、情緒が入り込む余地のない科捜研の日常は、それなり激務だろうからな・・・セクションの責任者として理解できるぞ。」

笑子が淹れたコーヒーのカップを、トレーから受け取りながら永山がしみじみ呟きます。

「部長の場合は、サボテンじゃなくって盆栽です！この前所用でご自宅にお伺いした時、奥様愚痴ってましたよ、盆栽の自慢話毎晩聞かされるって！」

笑子にプライベートをばらされた永山は頭を掻きながら、満更でもなさそうです。

「サボテンは、ストレス解消の為だけじゃないんです。最近分かったんですがサボテンのトゲの先端は、常に他の部分より幾分電位が高いようで・・・暗室に入れて長時間露出で写真を撮ると、ほら・・・。」

と云いながら、**ipad** を取り出し画像を立ち上げます。

「———わぁ！綺麗！」

笑子の声に促されて覗き込むと、暗い中にボンヤリと丸いサボテンの形が蒼白く浮き上がっています、所々眩しく輝いて幻想的です。

「“月影丸”って品種のサボテンです、トゲの先端の電位で周りの空気が励起されて光ってるんだと思います。」

「———励起って、プラズマ？」

玲子が **ipad** の画面をピンチインで拡大しながら尋ねます。

「プラズマのような高エネルギーの発光じゃありません。一時間の露出でやっとこの光ですから。」

「サボテンの“オーラ”だきっと、生き物だからオーラが出るんだ。盆栽も精魂込めれば後光が差すってよく云うぞ。」

その時、若い刑事が内線の受話器を置きながら、「———部長、警務部から連絡です、本庁からの召集のようで、TV会議室にお集まりください。」

「また、本庁のお偉方が何か面倒なことを云って来たか？黒木同席してくれ———。」

既にTV会議室には、本部長以下府警の各部長クラスが、信頼の於ける部下を引き連れ屯していました。

正面の巨大モニターには、長官官房室に隣接する警察庁幹部会議室の様子が映し出されています。

若いスーツ姿の官僚がモニターフレームに入ってきます。

「――三浦副長官！」

思わず玲子が叫びます。

「ああっ！黒木刑事・・・そんな後ろに控えてないで、もっと前に出てきてください。貴女方が実働部隊なんだから、貴女に話をしっかり訊いて欲しい。先日は職務上の是非とはいえ、大変申し訳ないことをしてしまいました、今でもあの時の頬の痛さとドスの効いた関西弁の忠告とは、私の心に響いています。また、今日は勝手なお願いなんです、貴女を頼りに思っていますので。」

「買い被らないで下さい副長官、私は一介の刑事です、何もお役に立てませんわ・・・。」

「ご謙遜を！」



僅かな間を挿み、全員が着座したのを確認して、三浦が襟を正して話し始めました。

「早朝からお集まり頂き有り難うございます。本日は、国家公安委員会を經由し、政府から皆様に或る任務を依頼したいと考えます。」

「本日未明、在日米軍の偵察機が京都市上空で、非常に強力な中性子線の照射を観測いたしました。上空からではなく、地表から照射されたもので、米軍の精密な解析によりますと、照射原点の緯度経度・時刻が、同様に本日未明京都市北部で発生しました地震の震源地・発生時刻とほぼ一致します。」

会議室内に低いどよめきが広がります。

「米軍からの一報直後には、政府内に深い憂慮も生じましたが、その後気象庁より地震波形解析の結果、人工的なものではない旨報告がありました。」

ほっとした安堵の気配が漂います。

「ただし、自然地震にしては不可解な部分もあるようで、現在引き続き詳細な解析を継

続していまして、地震と中性子ビームの関連性については、現時点明確ではありません。何れにせよ、中性子ビームの照射については、原因を突き止める必要があります。」

「そこで、陸上自衛隊原子力兵器専門班を中核とした、調査隊を編成いたします。京都大学複合原子力研究所・防災研究所地震予知センターにもご協力頂きまして、原子核物理・放射線物理及び、地震・火山との関連を調査して頂きます。」

「京都府警は調査隊の警護、移動の便宜、車両・用具の手配、地域住民からの情報収集、そして一番大切な任務ですが、メディア等流言飛語の抑制に当たっていただきたい。勿論、中性子ビーム照射が人為的な行為で、被疑者が存在するのであれば、その検挙もお願いしたい。」

「このTV会議の内容は、京都大学、陸上自衛隊、警察庁、京都府警の幹部でのみ共有されています、不要と思われる部署には、秘匿して頂きたい。対外的な発表は、後日内閣官房長官が行います。それまでは情報漏洩に留意して下さい。各部門とも本日これより準備を開始し、明朝7時に高雄山神護寺の駐車場に集合、中性子ビーム照射原点に向け出発いたします。途中徒歩の行程となりますので、対応する装備を忘れずに・・・何か、質問がありますか？」

玲子が手を挙げます。

「副長官にお伺いいたします、自然地震にしては不可解な部分とは、どの様な部分でしょうか？」

「震源が海拔700m程の山の頂上なんだそうです、火山の噴火でもない限り、内陸性の断層地震では考えられないことのようにです。―――ああ、それから明日現場での指揮は、陸自中部方面隊の幹部が執る予定ですが、黒木刑事には別働隊として、陸自の指揮を離れて自由に調査をお願いしたい。その為の信頼できるスタッフを、数名選んでいてください。私の権限に於いて、各部門に通達しておきます。」

高雄山神護寺の境内を流れる清冽な溪流の兩岸には、既に所々紫陽花の群生が花を咲かせ、穏やかな蒼から紫へのグラデーションが、瑞々しく鮮やかです。



溪流沿いの道を、奥寺が運転するジムニーが、調査隊の車列最後尾を追いかけて走ります。

やがて道は舗装された県道から、未舗装ダートの林道へと分け入ります。周囲は垂直に立ち上がる鬱蒼とした人工林(杉林)に囲われてきました。

「———こんな車で大丈夫なの奥寺君！酷い砂利道じゃない。」

笑子が心配そうな顔で、リアシートから覗き込みます。

「前に行く陸自の1/2tトラックより、このジムニーの方がダートに強いんだよ。だから、SRI機動車両に選んだ。———安心して任せてください！」

「天井のこの丸いのは？」

「360度ドライブレコーダー、インターネット経由でうちのラボでも常時モニターできるようにしてる。」

「そんな事より、山の頂上が震源だって云ったんですね、三浦副長官……。」

「———そうよ。重要な事なの？」玲子が尋ねます。

「震源は、断層破壊の始発点なんです。始発点が頂上だとすると、岩の破壊が麓に向けて下に拡がった訳だ……事例が全くない訳じゃないけど、どうも不可解ですね。」

「どうして？」

「断層や岩の破壊は、ストレスが最大の場所から始まると考えられています、だから土圧静圧の大きい地下深部から上に向けて拡がるというのが一般的です。」

「震源が山の頂上なのは、他に理由があると云いたいなの？」

「政府が最初に憂慮したのは、つまり人為的な爆発等に伴って生じる人工地震を想定したからだと思います。波形の解析からそれは否定された……ただし完全に胸を撫で下ろすには、何か釈然としない不可解さが残る。連続して起こった二つの事象を一度に説明するには、やっぱり核爆発が一番合理的だから……。」

「山の頂上で誰かが行った核実験で、自然地震が誘発されたって云うの！」

「副長官はきっと、そう考えてるんじゃないかと思います。」

「じゃ、あいつやっぱり私たちをモルモットにしようって考えてる、許せない！」
笑子の金切り声が狭いジムニーのキャビンに響き渡ります。

「日本で一番核兵器に敏感なセンサー達が前を走っていますから、大丈夫だとは思いますが・・・。」

山の中腹の、林道が大きく広がった場所に、一同車両を停めて下車します。

装備をリュックに背負い、細い登山道を一列になって登り始めます。

総勢約120名、其々の分野のスペシャリストの隊列です。

一時間ほど登ると、急に人工林の倒木が目立ってきました、山頂から麓に向かって大きな力で無理やり引き倒されたようで、太い幹がバラバラに粉碎されています。

「破断面が瑞々しいですね、ごく最近倒されたに間違いない・・・。」

粉碎された木片を手に取りながら、奥寺が呟きます。

更に頂上へ近付くと、立木が疎らになり、優勢となった倒木が斜面を蔽います、登山道確保の為、先頭の自衛隊員がチェーンソーを揮います。

頂上に到達したのは、正午過ぎでした。

同心円状に広がる倒木の中心に、地図には無い直径10m程の深い穴（クレーター）が口を開けていました。

「火口ですか？」

玲子が、京大のスタッフに尋ねます。

「―――違いますね、周囲に噴出物がありません。輻射熱も火山性のガスの匂いも全く感じられませんし、倒木が大規模に燃えた様子もありませんから、火山の噴火じゃありません。」

自衛官のひとりが、クレーターに線量計を向けます。

ゲージが反応してピープ音が響きます。

「**820 μ Sv/h**、余り長く居ない方がいいですね。」自衛官が呟きます。

「穴の底に水が溜まっていますね、サンプリング出来ますか？」

「―――そのつもりです。」

奥寺のリクエストに自衛官がスタッフを呼び集めます。

京都市街地の遠望から、北方に視線を移すと、深い杉林に覆われた北山の峰々が、蒼々と波打って何処までも続きます。

白く霞んだその先には、若狭の海に丹後の山々が・・・。

「火山の噴火や、核爆発で出来た穴にしては、内面の勾配が急峻過ぎると思いませんか？余程垂直方向に指向性の強い爆発だったのかなあ・・・。」

ジムニーのハンドルを切りながら、奥寺が呟きます。

「――でも、杉が綺麗に倒されてるわよ。」

「あれだけのクレーターだから、爆発の指向性がどうあろうと、杉は倒れるよ。」

「隕石の落下？」

「――それも考えたけど、角度が深すぎます。地表に対して、ほぼ垂直に穴が開いてる。」

現場の調査とサンプリングを自衛隊に任せ、別働隊の3人は住民の聴き取りの為下山します。

「――近くに地元森林組合の作業場と事務所があるみたい。まず、そこに行ってみましょ。」

「きんのうの明け方の地震のことですっしょか？何か変わったことなかったかて云われても・・・そうおすなあ、直前に大きな音がしどした・・・そうやおまへん、地鳴りやのうて、あれは山の音おすなあ・・・なんか乾いた破裂音どす。」

森林組合の顧問という肩書の好々爺が、事務所で対応してくれました。

作業場の随所に、黒々とした杉の巨木が堆く積まれ、フィトンチッドの健康的な香りが周囲に漂います。

応接の飾り棚には、大きな水晶の置物が、煌びやかな透明の光を放っています。

「地震で揺れる5分程前のことおす、この直ぐ下の自宅で寝ていどしたが、かなりたいそうな音どした、眼えが覚めて狼狽えて庭に様子を見に飛び出したんどす。ほしたら直ぐにえらい揺れに襲われまして、いや～魂げどした。」

「この辺のやまは、昔から色んな言い伝えがおましてなあ、やまの裏から後光が差したり、頂上から光の柱が立ち上りはったり・・・私も若い頃には、やまんなかで妙な光の塊に纏わりつかれた覚えがありますよって・・・地区の菩提寺で訊いてみはったらどうどす？今の住職はんが代を継がはってもう3年にならはりますが、古い記録見せてもろたらよろし。」

教えられた菩提寺は、溪流の袂に在りました。

本堂の横の、紫陽花の見える小さな日本庭園に、昼下がりの陽光が差し込んで、梅雨時の束の間の爽やかさを、堂内に醸し出しています。

組合の事務所と同じような水晶の置物が、祭壇の周りに幾つか鎮座しています。



30前後の若い僧が、作務衣姿で本堂に入ってきました、手には大きな茶封筒を抱えています。

「山の奇妙な現象について訊きたいと、伺いましたが・・・。」

綺麗な標準語です。

「昨日の地震との関連を調べています。」

「如何して京都府警の刑事さんが、そのような事をお調べになるのか、よく解りませんが・・・まあ、無粋な詮索は止しましょう。それはさて置き、あなた方の関心は恐らくこの書類に書かれていることではないかと思えます。」

そう云いながら、茶封筒から数冊の大学ノートと、二人の青年が並んで写った一枚の白黒写真を取り出します。

「写真の人物は、大分県別府市の物理学者と、先代住職、私の祖父です。

二人は東京大学理学研究所の学友で、祖父は地質学を専攻していました。」

「戦時中、地質が殊更特殊だというので、出身地のこの寺に数人の学友を伴って疎開してきました。連日周辺の山に足を運んで、様々な調査をしていたようで、マンガン鉱採掘の閉鎖された古い坑道が無数にありますから、現場での標本採取や計測装置を使った様々な実験にも、不自由は無かったようです。或る日、麓の林業業者から電源を借りて、長いケーブルで古い坑道に引き込んで、特殊な装置で実験を行っていたら、思いもかけない大停電事故を引き起こしたようで・・・周辺住民の輦蹙を買って、山で出くわす奇妙な現象はこの連中のせいだという根も葉もない噂もあって、全員失意のまま東京に引き上げざるを得なかったようです。」

「大学ノートは、戦後この寺を相続して引き継いだ祖父に、別府に居を移した物理学者から送られてきたものだと言っています。二人は成果を報告し合いながら、其々の地で研究を続けていたようです。」

「どういった種類の研究なんでしょうか？」

「――専門ではありませんので、私には分かりません。宜しければそのノートお貸しいたします。コピーを撮られて、郵送でお返し頂ければ結構です。」

3日後、京都府警5階会議室に於いて、調査隊の報告検討会が開催されました。

京都大学・陸上自衛隊中部方面隊・京都府警其々の担当からの現地調査報告に引き続き、全員で専門的な検討に入りました。

報告内容の要点としては――

- ①米軍偵察機が観測した中性子ビームの照射原点 (発信源) は、地上での厳密な座標測量により、山頂に生成されたクレーターの中心であること。
- ②クレーターを中心に半径150mに亘り、同心円状に杉の人工林が倒壊していること。
- ③倒壊した人工林の一部に、軽度の燃焼痕が認められること。
- ④火山性噴出物及び大気圏外飛来物の痕跡は、一切認められなかったこと。
- ⑤山頂クレーターの内側法面は、火山や隕石衝突で生成されるそれより、遥かに急角度であること。
- ⑥クレーターの深度は山頂から-82mであり、-55mまで液体の貯留が認められたこと。
- ⑦サンプリングされた上記液体の分析の結果、通常の地下水の他、微量のトリチウム (三重水素) とヘリウム3が含まれていたこと。
- ⑧トリチウムが放射する β 線 ($\approx 0.8\text{mSv/h}$) 以外の残留放射線は観測されなかったこと。

以上を踏まえ、調査隊が策定した当該事象を説明するシナリオの骨子は、――山頂直下約300m (クレーター法面角度から推定) に於いて何らかの原因により、天然の核融合 (D+D反応) が発生し、指向性の強い中性子ビームが山頂に向けて照射される。ふんだんに存在する地下水に吸収され大量の熱が発生する、圧密状態の地下水はクレーターを生成しながら中性子と共に山頂から噴出する。大気に開放された高温の水はクレーターの直上で水蒸気爆発を起こす。人工林の倒壊や燃焼痕はこれによる。

高エネルギーの中性子ビームは山頂と反対方向にも照射され、断層帯近傍の地下水を加熱し、内陸地震を誘発した。

天然核融合のメカニズム、中性子ビームの指向性が強い理由については、今後の調査研究に委ねる。

――結論として、当該事象は自然現象であり、人為的な行為によるものではない。

「まだあの大学ノート調べてるの？調査隊もとうの昔に解散したし、官房長官の会見で自然現象だと結論されて、政府やメディアからの問い合わせも無くなったじゃない・・・。」

久し振りに訪問した科捜研のラボで、コピー用紙の山に埋まった奥寺の鳥の巣頭を見詰

めながら、笑子が呟きます。

「三浦副長官も、**LINE**に何も云ってこなくなったわ。人が関与してないなら、全く関心を示さないのよ・・・政府は。」

「——ええっ！先輩、副長官と**LINE**の交換してるんですか？気持ち悪い！」

「自らの敵を知れって云うじゃない、この前**QR**コードを送ったのよ。」

「——それにしても、このノートはさっぱり解りません・・・手書きの図面が殆どなんですけど、図面に説明文がなくて、引き出し線とアルファベットのイニシャルだけなんですよ・・・一番多い図が、ほら、これ。」

見ると、卵型の楕円の内側に沿って、サメの歯のようなギザギザが書き込まれています。

無数の引き出し線があって、終端に番号が振られ、番号に対応したイニシャルの一覧表が右に在ります。

「**PFF**とか、**HMF**は一体何の略語なんだろう？**MT**や**CN**や**CD**や**MW**と云うのもあるし・・・。」

「米国優先株式、バイオ燃料、マスキングテープに中華人民共和国、コンパクトディスクに手塚治虫のマンガじゃないわよね・・・。」

スマホで検索しながら笑子が茶化します。

「ギザギザの先端に雷マークみたいのが描いてあるわね。ギザギザをトゲだと考えると、ほらこの前奥寺君が見せてくれた、サボテンのトゲの先の光。」

「光じゃなくて放電だとすると・・・コロナディスチャージ、**CD**か！」

その時、笑子のバッグから重そうな本が一冊、床に転げ落ちました。

見開きで開いたページの写真に、奥寺の眼が釘付けになります。



「——どうしたの？この本。」

「森林組合の事務所と、お寺の本堂に在った水晶の置物がすごく綺麗だったから・・・図書館から水晶の図鑑を借りて来たんですよ。」

そこには、大学ノートの図面そっくりの岩の断面が・・・。

「”ジオード”って云うみたいよそれ。岩石の空洞の中に水晶の結晶が成長したものな

んだって。」

じっと写真を見詰めていた奥寺が、「玲子さん、あの現場にもう一度行ってみたくになりました……。」

「森林組合の顧問と、菩提寺の住職と祖父について調べてみたのか？」

笑子が自分の手帳を開いて答えます、「顧問の名は石破誠司、40年来この森林組合で働いています。住職は小泉亘、祖父は安倍万次郎、苗字が違うのは娘の子だからです。」

「写真の物理学者は？」

「麻生賢治、戦後東大の理学博士号を取得したのですが、研究所で被曝事故を起して東大を退職、別府市の高校の物理教諭を亡くなる直前まで勤めていました。」

「この安倍万次郎と云う先代住職を中心にして、物事が動いている訳だな・・・。」学者2人の写真を見ながら永山が呟きます。

「先代住職も理学博士ですが、地質学で食べていくことが出来ず、家業の寺を継いだようです。娘は小泉綾、亘を出産した直後白血病で亡くなっています。亘は父親の小泉清吾に育てられ、先代住職が亡くなるまで東京で電機メーカーの技術者として働いていました。」

「95歳の大往生で安倍住職が亡くなり、寺を継ぐ者がいなくなって、地元から強く請われて京都に帰って来たようです。寺との血縁さえなければ、技術者として東京で平穩に暮らせたでしょうに、或る意味可哀そうな境遇です。」

「父親ひとり東京に残してか？」

「認知症で介護施設に入っているようです。」

「何か釈然とせんな・・・よし！お前たち3人、気の済むまで調べてこい。ただし連絡を密にすること、ジムニーのドライブレコーダーを常時作動させておくこと・・・。」



2時間後には、森林組合の石破顧問から事務所で再び話を訊いていました。

「そりゃ、あんさん、今の住職はんは東京の暮らし皆うっちゃって寺継がはった訳やから、檀家にすりゃ足向けて寝れまへんわなあ。将来約束しはった恋人も、東京にいやはったような噂もありますし。」

「じゃ、先代住職が若い頃住民の鬻蹙を買ったようなことは・・・。」

「あらしまへん！何かあったところで、檀家が話を抑え込んでしまいますやろ。お母はんのこともそうやったから・・・。」

「――お母はん？」玲子が訊き返すのを、気まずそうな顔で口を閉ざします。

場の空気を一新するように、奥寺が話を替えます。

「先代住職の学友たちは、山で一体どんな実験していたんでしょう？停電事故を起したというのは？」

「私の産まれる前の話ですから、よう解りまへんが。何でも、現場の坑口が送電線鉄塔の真下におしたようで、装置の電源入れはったら、送電線に火花がちって、燃えて落ちてきはったように伝え訊いとります。」

「何と云う装置だったんでしょうか？」

「その装置のことかどないか分かりまへんが“フューザー”とか“フューザー起動装置”とか、現場で立ちおうた巡査に説明しとったそうどす。」

「フューザー！フューザーと云ったんですね、安倍住職の学友が――。」

眼を見開いて興奮した奥寺が、それ以降口を噤んでipadの操作に没頭します。

途切れた会話を無理やり繋ぐ様に、笑子が図鑑を拡げます。

「こんな岩に見覚えありませんか？」

「――ああ、よう見ますわ、それこの辺じゃ“がま”とか“たまご”とかいいます。昔はマンガンの鉱山から、でかいんが採れたそうどすなあ。そう云えば先代住職も、それ集めはって実験に使とったようどす。」

「“たまご”で思い出した・・・ちょっと待っておくれやす。」

そう云って席を立ち、暫らくすると白いボール紙の箱と、水を満たしたコーヒーポットを持って再び現れます。

「先代住職が、亡くなる何年か前に迷惑かけたお詫びやゆうて持ってきたんどす。長年の研究の結実がこれや、やっとでけたゆうて・・・。」

箱の中には、ステンレス製のタマゴのような球体と、ガスコンロに火をつける“チャッカマン”のような器具が入っています。

「湯沸かし器どす、今からこれでお茶入れますさかい・・・。」

チャッカマンのコードを壁のコンセントに繋ぎ、タマゴの表面に5つある穴のひとつに筒の先を差し込んで固定し、水を張ったポットの中にタマゴを沈めます、トリガーを引くと他の4つの穴が青白くボツと光って・・・タマゴが筒から外れてポットの底へ沈みます。

暫らくすると、ポットの水が沸騰してきました。

「“熱タマゴ”いいます。何十年も研究した成果が湯沸かし器かいなゆうてそんなときゃ笑ろたんどすが、電気使うのは始めだけで、あとはいつまでも湯沸かしよりますけ、重

宝しとります。」

「顧問に断わって、チャッカマンみたいな分解してたけど、中身どうだったの？」
ジムニーの車内です、停電事故を起した坑口の場所を石破顧問から訊き出して、GPSを頼りに林道を進みます。

「高圧トランスにマグネトロン、筒の部分は導波管だ。携帯型電子レンジってところだよ。」

「流石に、あのタマゴみたいなのは分解していいって云わなかったわね、石破顧問。」

「あれは、目地が溶接されているからラボに持ち帰らないと無理だ。でも、内部の構造は見当がつくよ。」

「———大学ノートの図面？」玲子が呟きます。

「おかげで、ノートに書かれていたイニシャルが殆ど分かりました。MWはマイクロウェーブ、MTはマグネトロン、CNはクリスタルニードルだと思います。」

「CDはコロナディスチャージだったわね、PFFとHMFは？」

「フィロ・ファーンズワースフューザー、ヒルシュ・ミークスフューザーでしょうね。」

「フューザーって何なの？」

「核融合炉の一種です、“慣性静電場閉じ込め核融合”と云う方法で、比較的簡単に核融合を実現できるんですが、出力されるエネルギーより投入するエネルギーの方が大きいから、動力炉としては現実的じゃないんです。ただ、中性子線発生装置として有用で、実用化されています。」

「じゃ、あの熱タマゴが核融合炉(フューザー)だって云うの？」

「起動用のマイクロ波を遮断しても、水中で発熱し続けるのは、内部で核融合反応が継続してるってことですよ。ノートの図面に在るように、タマゴ内壁にクリスタル(SiO_2)のトゲがびっしり植えられているんだと思います。物理学者じゃないからよく解らないけど、マイクロ波のコロナ放電で荷電粒子化した重水素の原子がタマゴの中心部に向けてトゲの先端部から高速で移動して……。」

「じゃ何、さっき呑んだコーヒーには中性子が入ってたの！」笑子が顔を顰めて叫びます。

「中性子線に晒されたお湯でも、放射性物質が融けてなけりゃ大丈夫だよ、タマゴも完全に水没して、大気に暴露されてない。水から引き上げたら、自動的に作動が停止するって云ってたじゃないか。」

「でも、安倍住職と孫の小泉住職の間に何かありそうね。亡くなった娘の綾さんのことも気になるわ……。」

「石破顧問、言いかけて呑みこんじゃいましたね、坑口の調査が終わったら、お寺の小

泉住職にその辺の話を訊いてみますか？」

「小泉住職はこの事件の中心よ——。その前に、檀家の誰かに話を訊いてみたい。檀家の人たちは寺のことどう思ってるのかしら？」

安倍住職と学友が停電事故を起した閉鎖鉱山の坑口は、中性子ビームが照射されたクレーターの山の中腹に在りました。



人工林が林立する根元の窪地に、黒々と不気味な坑口を開けています。

近くに、コンクリートの古い基礎が叢から露出して見えています。

「送電線鉄塔の基礎だろうね、坑道の一番奥にジオードのサンプルを設置して、坑口からマイクロ波を照射したんだろう。中性子線遮蔽の為には、地下水を大量に含んだ坑道が理想的だからね。坑口から一部漏れたマイクロ波が、鉄塔の表面を伝って送電線にスパークを起したんだ。」

ヘルメットを装着し、LEDのライトで照らしながら暗い坑道に入ると、10m程でコンクリートで固められた壁に突き当たります。

「何だ、こんなに浅いのか、マイクロ波が漏れるのも無理はない。」

「古い鉱山だから安全の為に埋め戻したのね。あら、でも最近人が入ったような跡があるわよ……。」

ライトで足元を照らしてよく見ると、二筋の轍のようなものが、横の壁に続いています。

「——奥寺君、そこの壁ちょっと押してみて！」

驚いたことに、一体と思われた坑道の側壁の一部が、奥に開いて暗い穴が現れます。

身を屈めて進入し、ライトを上方に向けたその瞬間、全身に衝撃が走り3人ともその場に立ち竦みます。

満天のクリスタルの輝きが3人を優しく包み込んでいました。

なんとも云えぬ、幸福な感覚が其々の心を充填します。

「信じられない……。」

長い沈黙を破って、奥寺が感嘆の声を発します。

「超巨大ジオードです、こんなものが本当にあったんですね！」

「奥にも同じようなジオードが在りますよ！」

笑子の興奮した声が洞内に響きます。

折り重なる水晶の結晶を踏みしめて奥に進むと、また別のジオードがライトの光を反射して輝きます。

「複数のジオードが連続しているようですね、ジオードとジオードの間の壁に、誰かが人通口を開けたようだ。」

人通口は更にずっと先まで続いているようです。

「ジオードってどうやって出来るの？」

「マグマや地殻の中の空洞に、二酸化ケイ素などミネラルを含んだガスや熱水が浸入してきて、時間を掛けて結晶化したものです。通常は拳大から精々サッカーボール程度なんですが、人が入れるなんて訊いたことはありません。」

「笑ちゃん！綺麗だからって触っちゃ駄目よ、もしポケットにでも入れたら、不法侵入に窃盗罪だからね！」



洞内は梅雨時のこともあって酷い湿気です、15分もすると流石に3人とも、いたたまれなくなって坑口に引き返します。

外に出ると、ジムニーの周りを十数人の男性が取り囲んでいました。

全員、射貫くような視線でこちらを見詰めています。

「―――地元の方ですか、京都府警刑事部捜査第一課です。」

そう云いながら、笑子が警察記章を提示します。

男たちは眼を逸らさず、じりじり近付いて来ます。

「笑ちゃん、こっちに来て！中に入りましょ！」

玲子が叫んで再びジオードの洞窟に足を踏み入れます。

「何だかみんな危険な視線だったわ、振り向かないで先に進んで！」

人通口を幾つか通り抜けると、一気に天井が開けた巨大な空間に出ます。

足元に水晶の破片が堆く積もって足を取られますが、壁や天井に六角柱の結晶はひとつとして存在しません。

「―――如何したのかな？爆発でもあったのか？」

立ち止まって呟く奥寺の尻を押しながら、「呑気なこと言ってないで先に進んで！追っ駆けてくるかも知れないじゃない！」

暫らく進むと、先が青白く明るくなります。

人通口を抜けると、再びびっしりと水晶のトゲ (結晶) に覆われた広大な空間の、一段高くなった中央に供え物と共に祭壇が設えられ、人と等身大の菩薩像が、後光を放ちながら慈悲深く見下ろしていました。

見上げる洞窟の遙か上空には、ボンヤリと光る霞のような塊がゆったりと揺らぎながら滞留し、時折水晶のトゲと接する辺りから、鋭いスパークを発しています。

法衣に身を固めたひとりの僧が、菩薩の背後から現れ、曲録に腰を下ろして読経を唱え始めました。

「———小泉住職！」

玲子の声に僧が振り返ります。

「ああっ！何時ぞやの刑事さん……。こんな処まで何の御用でしょうか？」

「此処は何なんでしょう？」

「私たちの寺の、奥之院本殿です。」

「頭の上の光る霞のようなものは？」

「常温プラズマ、だと訊いています。」

「常温プラズマ！」奥寺が眼をむいて叫びます。

「祖父と違い学者じゃないので、上手く説明できませんが……。この洞窟は外側から常に大きな土圧静圧を受けています、水晶は圧電体ですから結晶の先端に表面電荷が集中して、コロナ放電が発生し、周りの空気や水蒸気が荷電粒子と自由電子が飛び交う相 (物理状態) になります。エネルギーは高くないので温度は上がりません。プラズマが安定しているのは、水晶の先端で位置を穏やかに拘束され、コロナ放電によって常に荷電粒子を補給されているからだそうです。」

「子供の頃、何度か祖父に連れられてここに来ました。面白いものをお見せしましょう。」

と云うと、祭壇の中央に立つ大きな蠟燭に向かい厳かに合掌して、意識を集中します。

「ああっ！住職にプラズマが絡みついている！」笑子が悲鳴を挙げます。

ユラユラと光る霞が全身を覆い尽くすと、ゆっくりと両手を伸ばし、蠟燭に向かって大きな拍手を打ちました。

その瞬間、鋭いビームが走って、蠟燭に火が灯されました。

住職の拍手から3m程距離があります。

「私の母も同じことが出来たと訊いています。その為、私を産んで直ぐ白血病で亡くな

りました。」

「私どもの寺は、この能力を持った血族で代々引き継がれてきました。そしてその秘密を、檀家の人々が外部に一切漏らさず守ってきたのです。祖父は恐らく、そこに科学のメスを入れようと考えた。一旦は檀家に疎まれて、東京に追い返されたのですが、戦後何とか折り合いをつけて寺を引き継ぎました。」

背中に人の気配を感じて背後を振り返ると、暗く無表情の人影が人通口からゾロゾロ入ってきます。

「ギィァア〜！」笑子が甲高い悲鳴を挙げます。

「――驚かないでください、檀家の皆様です。」

気が付くと既に数十名の年老いた男女が、水晶の床にしゃがみこんで、祭壇の上の住職を見上げています。

蠟燭の炎に照らされて、人々の顔に赤みが増し、穏やかな喜びの表情が広がります。

「――でももう、これで終わりにします。檀家の皆様も、私の命も、もう長くは続かない。だから終わりにします・・・刑事さん、そしてお連れの方も、どうか速やかにご退場ください。ここで失礼いたします・・・さようなら。」

「――小泉さん！小泉住職！」

玲子の叫びに耳を貸さず、檀家たちに人通口の外へ押し出された3人の眼の前で、大きな岩の蓋がピッタリと閉じられました。

「玲子さん、笑さん大急ぎで走って！死ぬ気で走れ――！」

奥寺の大声に3人は出口に走り出します、体の彼方此方を岩にぶつけながら、何度も転びそうになりながら・・・強い振動が足元を突き上げます、天井の水晶がヘルメットの上から叩きつけます。

肩口に強い痛みを感じて床に突っ伏します、煌めく無数の結晶が周りに降り重なって、体を囲い込んできました。

開ききった瞳孔がゆっくりと窄まり、ボンヤリとした視界に奥行きが甦って、認識できる画素が一気に増えます。

記憶の奥の誰かが、顔を覗き込んでいます。

「お目覚めですか・・・よかった。」

「・・・三浦副長官。」

病室のベッドの上でした。

医師が脈と呼吸を確認し、明るく2度頷いて退室していきます。

体を起こそうとすると、「鎖骨を骨折しています、動かないで――。」

三浦が慌てて押し留めます。

「・・・他の二人は？」

「隣の部屋で休んでいる、二人とも軽症だ。」

見ると足元で永山が優しく見下ろしていました。

「永山部長にお願いして、ジムニーのドライブレコーダーをモニターさせて貰いました

。住民が坑口の周りに集まってきたところで、待機させていた機動隊を派遣したんです。洞窟の水晶の山から助け出した時、酷い出血の中、完全に瞳孔が開いていたので肝を冷やしました。」

「——小泉住職はどうなったのですか！」

「洞窟の奥で爆発がありました。先日と同様中性子線が照射され、それに続いてM4.8の地震が発生し、小泉住職は数十人の檀家の人々と一緒に、洞窟の中で亡くなられたようです。」

「4年前に白血病の宣告を受けてたようだ、保険の受診履歴を調べて分かった。」

「丁度その頃から、公安調査庁が内偵を入れていた団体なんですが、どうにも詳細が掴めなくて・・・中性子線照射の件を機に、国家公安委員会を通じて警察庁に協力を求めました。」

隣の部屋の二人が車椅子で部屋に入ってきました、彼方此方に包帯を巻いて痛々しい、笑子が玲子の頬にそっと手を添えて、涙ぐみます。

それを見た三浦が、「明日の閣議の準備があるので、次のリニアで帰京します。皆さんごきげんよう・・・本当に有り難うございました。」

深々と一礼して部屋を出て行きました。



「あの後、祭壇のジオードの中で何があったの？」

再び科捜研のラボです、何時もの様にカップルと、今日は刑事部長の永山が油を売っています。

「マグネトロンを作動させたんですよ、観音様の後ろにポータブルジェネレータが一部見えてました。印加したマイクロ波によってコロナ放電が一気に増大し、プラズマをジオードの中心部に圧縮します、重水素の原子核同士が融合して、中性子を放射しながら、比較的穏やかな核融合反応が継続します。」

「——比較的穏やか？副長官は爆発って云ってたわよ。」

「そこは一応核融合ですからね、それなりの熱も圧力も発生します。でも住職たちが亡くなった直接の原因は、熱や圧力じゃなくて、中性子線直射の為だと思いますよ。」

「そう云えば、検死報告に外傷は殆ど無かったって書いてあったな。」

「恐らく、小泉住職は一つ手前のジオードで一度実験したんだと思います。水晶が剥落して壁や天井に何もなかった洞窟があったでしょう。その実験が最初の中性子ビームと、地震を発生させたんだと思います。」

「なぜ住職は、そんな実験をしたのかしら？」

「祖父が行った実験を再現してみたんじゃないですか。安倍住職の時代は、理論はあっても実現する機材が無かった。マイクロ波自体技術的に黎明期でしたから、幾ら実験を繰り返しても、核融合まで至らなかったと思います。」

永山が、腕を組んで話し始めます。

「小泉住職が寺を引き継いだ折、全檀家寄り合って集会を開いたようだ。そこで寺の運営に関して意見が二つに分かれた。戦前からの古い檀家は、今までの寺の運営方針をそのまま継承する。新しい檀家や若い連中は、奥之院やジオードを一般に公開して、常温プラズマの分析を研究機関に依頼する、小泉住職や母親の特殊な能力についても解析して貰う。山で起きる奇妙な現象の噂を、これ以上抑えきれないと云うんだ。」

「大勢は公開する方向だった、小泉住職も熱心に公開を主張していたそうだ。古い檀家の考えも尊重して、取りあえず3年間今のまま運営し、3年後に全てを公開する方向で折り合いがついた。洞窟の奥で亡くなった人々は、皆古い檀家だった。」

「古い信者の信仰に責任を感じての、殉教だったのかしら・・・。」

「自分の余命に関する絶望感もあったんだろう・・・命の価値観の捉え方だ。」

「新聞の見出しの“カルト宗教による集団殉教”で、単純に説明しきれない奥行きのある話ですよ・・・。」

奥寺がにこやかに顔を上げて、重い空気を一掃します。

「そんな事より、今回の件で素粒子物理学と地震学の分野が大変なことになっています！」

「———何が大変なの？」笑子が紅茶を啜りながら尋ねます。

「中性子ビームの照射で、断層地震が誘発されることが、今回2度に亘って実証されました。断層の構造と、ストレスの掛かり具合が解るのであれば、断層の必要な場所に中性子ビームを照射し続けて、事前に制御された自然地震を起し、ストレスを開放することが出来るって云うんです。」

「———それで？」

「何月何日何時に、防災の為の地震を起しますと発表したら、準備対応出来るじゃないですか。」

「成る程、ヤバそうな場所を最初から潰しておくわけだ、大地震の予防接種か！」

「素粒子物理学の分野ではあの“熱タマゴ”です。ポットの水を加熱し続けてた訳ですから、内部で核融合反応を安定して維持してる訳です。常温核融合の技術として完成品です。鉄やニッケルより重い元素については、安定核核分裂によって目途が付きつつありますが、軽い元素に関しては、熱タマゴの常温核融合を研究することで目途が付けられると思います。」

「———何の目途？」

「原子核編集 (元素合成) です！」

「―――何それ？」

「屑鉄の山から、金の延べ棒造ろうって話だ、あんまり相手にせん方がいいぞ！」
カップの紅茶を飲み干しながら、永山が大声を上げます。

穏やかな静寂を挟んで、奥寺が尋ねます。

「玲子さんは、何時の時点で小泉住職が今回の件の中心だって思ったんですか？」

「茶封筒で大学ノートを持ってきた時・・・私たちの疑問に先回りして資料を出してきた感があるの。もうあの時、事件の落とし処をはっきり決めてたのかも知れないわね、小泉住職。」

「それじゃ、私からも奥寺君に質問・・・。」

「―――何ですか？」

「どうして、照射された中性子ビームは、上下に指向性が強かったの？それが為に、私たち助かったんでしょ？」

「核融合反応のあったジオードは、二つとも天井が異常に高かったじゃないですか、常温プラズマも上下に長い紡錘形で安定していたと思います。恐らく中性子ビームは紡錘形の軸線に沿って照射された、どうしてそうなるかは、今後の研究課題ですね。」



その時、穴見女医の賑やかな声がラボに入ってきました。

「どうしたの皆さん御揃いで、今日は珍しいお土産持ってきたのよ。サボテンのお漬物・・・給湯室に置いてあるから後で食べてね・・・それからあんた、私とレスリングしに週末通うって云ってたけど全然来ないじゃない。今度、ロメロスペシャルで足腰立たない様にしてやろうって思ってたのに残念ね。」

「ストレス解消のお役に立てないで、済みません～。何なら、府警の道場で今からひと汗かきますかあ、パロスペシャルなら得意技ですからあ。」

―――終わり。

以上、全てフィクションであり、実在する個人・団体と一切の関係がありません。悪しからず
ご了承下さい。尚、添付しました写真は、Photock 及び PhotoAC より転載させて頂きました。

玻璃の先で刺激して！

<http://p.booklog.jp/book/121439>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/121439>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト